

---

# おばけのてんぷら

芽が出たたまねぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おばけのてんぷら

### 【Zマーク】

Z0565A

### 【作者名】

芽が出たたまねぎ

### 【あらすじ】

幽靈を退治する天使警察の話。ホラーじゃないし、怖いシーン、グロテスクなシーンはありません！仲間たちと一緒に主人公は学校生活と任務を両立できるのか・・・！頑張れ！少年！！

## キー・パーソン

信濃川高校に佐倉祐太郎は通っていた。いつもの平凡な毎日。

良い事なのだが、好奇心旺盛な彼は少し退屈していた。

しかし、ある日でてきた人物がきっかけで彼の日常はがらっと変わることになる。その

「ある日」

が一週間前だ。ここは彼のいる2-Bだ。

「起立！きょうつけ！礼！」

「おはようございます」

ばらつきのあるあいさつが終わったあと、クラスの生徒たちがのろのろと着席した。

皆随分ねむたそうだ・・・といつても、いつも眠たそうなのだが。「なあ・・」

祐太郎に前の席の男子が声をかけた。

彼は祐太郎の親友で、沖田真治という。二人は何かと子供っぽく、話が合う。

「何？」

真治の顔が二コ二コしている。だから祐太郎は少しワクワクした。

「今日転入生がくるらしいぜ。」

「え！？」

祐太郎はとても驚いたようだった。

しかしその瞬間には目をキラキラさせていた。

そのリアクションは誰が見ても一目瞭然に彼の心情がわかるくらいオーバーだった。

もちろん、いくら祐太郎でもただでこんなに大げさなのではない。彼はこのクラスで唯一の一人席。

つまり今隣がないのは祐太郎だから、転入生が来た場合、彼

の隣になるのだ。

祐太郎と真治はすごい勢いでお互いの想像の転人生を話していた。もはや止められようがなく、いきすぎるところまで話はいつていた。

「ほら、シルヴィーがひどいんだぞ！」

「遼一よ！ 腹が電子レンジになつてんだよ！」

「それより、おまえの仕事は？」

卷之三

と言つた。ざわめきがおこる。祐太郎と真治は、自分たちは早く知つていたということで得意そうな笑みを浮かべた。ガララ・・・転入生がドアを開けた。めがくりつとした女子だった。そして二人はほぼ同じタイミングで思った

（腰にシハシカ）（腹にシハシカ）ハレハレハレハレ

つたが・・・。この後のは簡単にまとめるところ人が仲良くなり、お互い行動をともにする親友に近い仲となって日々をすごすだけなので話を現在にもどそう。きょうは9月22日祐太郎はすばらしくぼけとしながら学校に向かっていた。

- ፳፻፭፻ -

元氣よく女子があいさつをしながら呑流した。

登校中たまたま会ったら一緒に登校

それが彼と仲の良い2人の決まり

さて、彼女が例の人物だ。

無邪気で明るく、癒し系というか天然というか、ビートなくぽやぽやした雰囲気をもつていて。

この日の学校も普通だつた。

実花が毎度のように教科書を忘れたり、3人で授業中なのも忘れるほど熱くくだらない話をして先生に怒られたり、三人で笑いながら

秘密基地である屋上にある倉庫で弁当を食べて・・・変わったことは、放課後祐太郎が一人で居残り掃除をした。

ただそれだけのことであるはずだった。いつもなら

「私も残るよ」

という美香の一声がかかり、

「しゃあないな、俺だけ帰ると悪役みたいでやだから手伝つてやるよ。」

と真治が加わる。

といった形なのだが、kyうのは実花が用事があるところとどうはいかなかつた。

ふと祐太郎が後ろを振り向くと、誰もいないはずなのに、顔色の悪いおつさんがたつていた。

祐太郎はもう、そのおつさんが生きてないことを知つてゐる。しかしたいして驚きもしなかつた。

もう慣れっこだつた。

こういうのには・・・確かに小さい時には怖がつた。

しかし彼ら・・幽霊は脅かすだけで危害を加えないことがわかつた。それに、なぜか祐太郎に会うと彼らのほうから逃げてしまつことも多い。

最近祐太郎がきずいた事がある。

集中してみると、彼らの頭にはあれがあるのだ。

あの昔じみた幽霊の象徴であるあの三角の布・・・まあ、祐太郎が見るのは白じゃなくて黒だが・・・そして今、ふと祐太郎はそのことを思い出し、もつとよく見れば新しい発見があるのでないかとマジマジと靈のおつさんの頭の方を見つめた。

すると、布に白く文字が書かれているのがわかつた。

こういう新しい発見が本当にあつて祐太郎は驚いた。そして

「は - 0 3 - 2 2 1 7 - - ?」

と、そこに書いてある文字を口にした。

おつさんはありえないくらいビクッとした。

まるで自分の靴下に納豆が入つてたみたいに・・・。そのあとオッサンは

「G・V・Aだったのか・・・やられた。」

と呟くやいなや

「くそーーっ」

といつて襲い掛かってきた。

「うわっ！」

と祐太郎が腕を櫛のようにしたのとほぼ同時に、

「バシュウッ」

とすごい音がした。

オッサンが消えていくのが見えた。

そして、蒸発して天に昇つていく金色の粉のようなものの辺りから、白い魂のような、お化けのようなものがつきあがった。

「捕獲体制万全！ネット発射！！」

と言ひ声が聞こえ、それはネットの中に捕まつた。捕まえた声の主は、なんと実花だった。

## キーパーソン（後書き）

あの・・つまらなかつたと思こますが読むのできればやめなこでく  
ださい・・。本当にじょひへあれば面白いんで・・いや本当に  
ねがいします!!

## 混乱（前書き）

第一話・・長くてほんとにすみませんでそいた！！！

## 混乱

「実花・・・？」

祐太郎は、この状況を察することができなく、呆然とした。

「私たちね、あなたを迎えてきたの！一緒に仕事できるなんて凄くうれしい！祐太郎君を仲間に入れるって決まった日からね、私待ちどうしくって・・・」

実花は祐太郎の困惑した表情をよそに無邪気にはしゃいだ。

「ちょ・・ちょっと待ってくれよ！俺には何が・・」

祐太郎がそいつたとき、オッサンが消えたときにでてきたモクモクとした白い霧のむこうから、20代くらいの勇ましそうな、黒髪の男が現れた。

「はっはっは。おい、実花。彼はいま混乱してんだ。そう急ぐな。

「あ、そつか。ごめんなさい祐太郎君。」

「いや、あの・・・」

祐太郎が、頭をかきかき次の言葉を探していると、男は「

「まあ、気を取り直して・・・」

と言つてから笑顔で、大きな声で

「君はG・B・Aに加わることになつたんだ！おめでとう！歓迎するぞ！！」

と言つた。

「本当ですか！？やつたー！」

もちろん祐太郎は素で喜んだ。その後すぐに、ある疑問がうかんだ。

「あの・・G・B・Aで何ですか？」

そう言つた時、後の一人がとても驚いた。

「え・・・！？知らなかつたの！？」

「それは計算外だ！色々説明しなければならないなあ。」

男はそういうてしばらく考えた。その間に、祐太郎は彼にとつてシヨツキングなものを見てしまつた。

黒々としたでかい「ゴキブリ」を知らぬ間に自分の足が踏んでいた事實を・・・。

「うぎやあああ――ラ・・・ラクカラーチヤー――（ラテン語・ゴキブリ）」

そう叫ぶやいなや、彼はこけた拍子に机の角に頭部を強打した。気絶した祐太郎のできあがりだつた。

## 混乱（後書き）

第三話で面白くある予定なので、第三話も是非見てください。お願  
いします！

祐太郎が起きると一見、何の変哲もない少し懐かしい雰囲気のある家にいた。

そして実花と男から「J」が彼ら、G・B・Aの秘密基地である「J」と。

実は天使というのは本当にいて、新しい生命を作り出す組織と、悪さをする「ゴースト」を退治するG・B・Aのふたてに別れている「J」と、その他色々なことを教えてもらつた。

「だいたいわかつたけど現実離れしそぎでいるよ　　・　・　・」  
祐太郎が不安げにいった。

「ほう、美香から君はかなりのドリーマーだと聞いたが・　・　・そつか・  
・受け入れにくいよなあ。はっはっは」

「でもね、わたし達月組は人手がたりないのよ・　・　・」のままじゃ

いつ解散命令がくるか・　・　・」「月組・　・　?」

「ああ。G・B・Aの方はその中でも15グループに分かれてるんだ。  
だ。」

「じゃあ美香やえーと・　・　・」

「正志。私達は正兄つてよんでもるから、正兄でいいよ！」

「いや、そっちの方が慣れてるからそう呼んでくれ！」

「あ、はい！」

「さつきの続だが、そうだ。俺達はその15グループのうちの月組だ。」祐太郎はもうG・B・Aの存在を信じていた。というより好奇心を搔き立てられていた。「あ・　・　あの俺・　・　・」

「ん? 何だ?」

「迎えとか言つてたけど俺、G・B・Aに入れるんですか?」「え・

・　?」

「はつはつはもちろんだとモ!!--」「やつた――!!--」

祐太郎はものすごく喜んだ。それを見た一人もすごく喜んだ。まるで「バンザーアイ！バンザーアイ！」と言ってる三人はバーゲンで掘り出し物をゲットしたオバハンみたいだった。

ひらこじとへへ

(後書き)

パソコンがうまく使えないから「続きを」って書くのと「ぞくせ」ってやって変換します。

## メンバー紹介（前書き）

自己紹介したいのにやりかたがわからない・・・（～～～）こんな情けない自分がよろしくお願いします！

## メンバー紹介

「そうと決まれば自己紹介だ！お～い！はいっていいぞ～！」  
正兄がそういうとゾロゾロと・・いや、今のは嘘だ。

伊達つぽいというかいかにもモテそうな銀髪の少年とキャスケットをかぶったチビスケがしてきた。一人ではゾロゾロとは言わない。

「俺はラスク。よろしくな。」

銀髪の方が手を差し伸べた。

「おう、俺は祐太郎。」

祐太郎は彼の手をとつて握手をした。

「焼きそば、お前年いくつ？」

ラスクが聞いた。

「え、俺？今は16だ。」

祐太郎は答えた。

「へえ、じゃあ俺と一緒にだな。」

そう言ってラスクは一ツと笑った。

「あれ、お前俺のこと焼きそばっていわなかつた！？祐太郎だから！俺、祐太郎だから！－－一文字も合つてねえよ！」

祐太郎はつっこんだ。おそらく、これが漫画だったら

「ガビーン」

という効果音が入つただろう・・・

「うつさいなあもお、わかつてんよそんなの。でもお前にはそれが

にあつてんだよ。つべこべいうな。いや、むしろありがたがれ！」

「逆ギレかよ！いいよ、お前のこともパン菓子つてよぶからな！！」

「スト一一一ヅ」

そんな二人の会話をさえぎるようにちびスケが叫んだ。

「いつになつたら俺の出番になんだよ！」

祐太郎がそつちに顔を向けた。

「おう、悪かつたな・・チビスケ、お前の名前は？」

「チビつて言つたな！！餓鬼扱いすると痛い目合うぞ！！」

そう言うとチビスケは素早くキャスケットの上にしてくる「ゴーグル」を目にあて、マスクをした。それから

「俺はな、マーク・ワインテッドつーんだ。」

と言つてポイとドクロが描かれた小さな黒い玉を祐太郎に投げた。

「ヤベ」

とラスクが言い、正兄も実花も腕で顔を防ぐ体制をとつた。

もちろんラスクも・・・三人の行動はほんの一瞬で完了した。

「ん？」

祐太郎が何気なくそれを受け止めた瞬間、その玉はボンツと音がついて爆発した。そして灰色の空気がいつきに広がつた。

「うわあああーーー目・・目がい・・ハックション！…痛・・ハクション！…ウオオオオハックション！く・・くしゃみと涙が・・ハクシユツ！と・・止まらねえ！！」

涙とくしゃみにやられている祐太郎を見て

「どうだい！ーこの未来のからくり職人マーク様が開発した泣きつ面に蜂爆弾！ーちなみに主材はたまねぎとコショウだ！！」  
と得意そうにマークは言つた。

祐太郎のくしゃみと涙の地獄は5分続いたのだつた。

なんだかんだで仲間とうちとけられて良かつた良かつた。

## メンバー紹介（後書き）

あけましておめでとうございます！！！後書きで書くことではないと思つのですが、今年も良いお年をーー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0565a/>

おばけのてんぶら

2010年10月9日05時43分発行